京交山岳部報

No. 377　　'84　3月号

昭和58年度　山岳部総会

日　　時　3月9日（金）　午後6時　下鴉寮
会　　費　¥1,500.（夕食を用意します。）
議　　題　1. 58年度　事業報告について　（岡田部長）
　　2.　〃　会計報告について　（川原会計担当）
　　3.　〃　山岳活動表彰について　（三橋担当）
　　4. 59年度　山岳部役員　支部委員の選出について（広瀬光司会担当）
　　5.　〃　予算（案）について
　　6.　〃　年間スケジュールについて
　　7. その他　連絡事項
申 込 み　設計課　広瀬光太郎　または、鷲見敏一（TEL 3418）まで

〔第1475回例会〕　冬山訓練

伊　吹　山　（T）

日　　時　3月3日（土）～4日（日）　山頂ホテル前　15時集合
担 当 者　本局　広瀬光太郎（TEL 3418）
備　　考　岳連主催の冬山指導員検定会に生徒役で参加しようと思っていますので見学方々多数参加して下さい。

企画運営リーダー会

3月16日（金）　三橋宅

〔第１４７６回例会〕

飯盛山△901m

日　　時　3月6日（火）

コ　ー　ス　R.9号ー園部ー天引峠ー篠山R.175号ー中町ー加美町多田、破線路を都界稜に上り、南西に飯盛山を登るー往路をもどる。

担 当 者　ＯＢ　伊藤潤治（TEL　463−4936）

〔第１４７７回例会〕　スキー登山

虎　子　山　（T）

日　　時　3月18日（日）　九条車庫　5時出発

コ　ー　ス　美東…大平スキー場…国見峠…虎子山

担 当 者　本局　大槻雅弘（TEL　2266）

備　　考　マイカーで行きますので連絡して下さい。

〔第１４７８回例会〕

清水・南部

日　　時　3月19日（月）〜21日（水）　19日　20時出発

コ　ー　ス　第1日　名神京都東ー東名　静岡、安倍川を平野へ溯上
真富士山△1401 *m* をピストンのあと梅ケ島温泉
第2日　バラノ段△1648 *m* と八紘嶺△1918 *m* をのぼり梅ケ島温泉
第3日　山伏岳△2014 *m* 登頂のあと、往路を帰る。

担 当 者　ＯＢ　伊藤潤治（TEL　463−4936）

備　　考　マイカーで行きますので連絡して下さい。

〔第１４７９回例会〕　ファミリーハイク

石仏峠　（R）

日　　時　3月20日（祭）　6時40分京都駅発　国鉄バスに乗車

コ　ー　ス　京都ー周山ー井戸…イモジ谷…石仏峠…独峠…岩屋橋ー三条京阪

担 当 者　ＯＢ　津田　実（TEL　2243）

備　　考　2月例会で二ノ瀬ユリ道を行きましたので変更します。

〔第１４８０回例会〕　スキーツアー

野　伏　岳（予定）　（T）

日　　時　3月24日（土）〜25日（日）

コ　ー　ス　名神ー北陸ー南条ー九頭竜ダムー石徹白…白山中居神社…和田山牧場…野伏岳

担 当 者　本局　広瀬光太郎（TEL　3418）

備　　考　参加者によりコースを変更する場合があります。

山声雪語

ブランド品と名品

岡　田　茂　久

ティシュペーパーのテレビコマーシャルで〝私もブランド品を使ってます〟というのがある。若い女の子がこれみよがしにぶらさげているブランド品と称するハンドバッグ、私にはどうみてもあの柄がセンスあるようにはみえないのだが、どうも我々はブレンド品と称するものには弱いようで、はてはカバンからウエア、釣針に至るまでニセモノまでが横行している。大邸宅や高級車まではいかないまでも高級品（当人だけの感覚が多いが）を持っていますと人の視線を意識しながら優越感に酔っている分には害はないが、ブランド品、すなはち名品と錯覚しこれを使っていればまちがいないという感覚が誤りを起すものである。それにしてもティシュペーパーのテレビコマーシャルのシャレがにくい。

とはいうものの山屋についても昔からブランドというか名品指向はあった。私にしてもザックは市沢のキスリング、テントは片桐のピラミッドと聞かされ、村上のオッサンに頼み込んで待ちに待ってやっと手に入れたオリジナルの靴、ピッケル・アイゼンはカドタ、ナイフはガーバー、これを手に入れたときはうれしかった。夜中にナイフの刃を指でなぞりニヤリ、だれかみていたらさぞ不気味であったろう。ピッケルについても思い出がある。山の大先輩から〝これが仙台山　内のピッケルや〟とみせられた逸品、やゝ黒サビが沈んではいたがブレードからピックに至る日本刀を思わす優美な曲線と、におうような地肌のにぶい光り、思わずみとれこれは欲しいものと念願していたがいまに手に入れることができないでいる。もっともこれは実用品とはいえないかもしれないが。

手元の山雑誌の広告をみると用具の進歩には目をみはるものがある。その豊富さは広告にも店頭にもあふれかえっている。さあこうなると何か装備を新調しようと思ってもどれがいいのか判然としない。ままよ名の通ったブランド品ならまちがいなかろうと買ってしまうことが多いのではないだろうか。

しかし装備・道具についてはブランド品であろうとなかろうとＴＰＯに応じて使いこなしてこそ自分のものになるのである。ブランド品であっても所詮一律規格の量産品である。使う側としてもベテランありビギナーあり大あり小ありでさまざまである。それを山用品屋で推められたからとか雑誌の広告で見たからといって購入することが多い。しかし結局は使いこなせずパッキングケースの下積みになってしまっているのが案外我々の身近にあるのではないか、そうでなくても使い難いなと思いながら無理を承知で使用し、余計な負担を体にかけバテや不具合になってしまっていることがある。登山の失敗は装備の選定の誤りを原因とすることも少なくないのである。かって一時期輸入物の外国規格の登山靴をブランド品というだけで足を靴に合わせて購入つらい山行となった覚えのある人も多いことであろう。

カッコ良くみんなが使用しているものについてはたしかにいい物が多い。しかしその装備が自分に使いこなせるか、自分の体にフイットしているか充分にみきわめて購入したいものである。そのためには信頼できる経験者のアドバイスを受け、山用品店でも目先きにとらわれることなく正しい商品知識をもった店を選びたい。

前年、私も一泊程度の山行用のザックを貢替えるため、皆なが使用している外国有名ブランドのザックを購入したいものと行きつけの店をたずねたが、結局購入したのは国産のものであった。値格も安くなにより使い易く今日も私の背中の一部の様な感じで愛用している。

山の装備はブランドにこだわることなく使い易く、技量に応じ身体にあったものを選び、自分自身の名品として愛用したいものである。

第１４６８回例会

高　見　山

沢　井　佳　三

1月１５日、7時５分九条車庫出発。天気予報は雨であったが、なんとかもちそうな空模様である。一行はマイカーに分乗、途中合流者との待合せ場所の連絡ちがいから時間待ちのハプニングもあったが、無事高見トンネル工事口まで到着。この頃から天気はしだいによくなってきたが、道路は凍結しており、大型トラックも立往生の状態で通行不能である。服装を整え、ここから徒歩で高見小峠へ向う。道路は陰の部分は凍結し、全体に雪が大根おろし状になっている。

高見小峠に着いたのは、１１時１５分。杉谷の方から登ってきた家族連れが２０人程先に休憩していた。ここで約２０分の休憩、岡田部長の声でにぎりめし１個を大急ぎで口にほおり込み、アイゼンをつける。このつけ方がよくわからないので、モタモタしていると、鷲見氏がていねいに教えてくださった。ようやくつけ終るとすぐ出発の時間である。

道路からすぐ上の登山口から勾配は急になる。最初のピークに出たのは１１時５５分、ここから稜線を行く。左手斜面は樹氷状の木が多く美しい。このあたりで天気は快晴となり山歩きには最高の日和である。

山頂到着は１２時５５分である。付近は家族連れ登山者で超満員、歩く道路もないほどである。ようやく三角点を探しあて、とにかくバンザイ三唱。各人腰をおろせるところをつくり、昼食につく。１３時３０分頃から霧りはじめ、急に冷えはじめた。記念写真をとってもらい、下山する。眼下の大峠に車が小さく見える。車道にでるまで３０分。ここから小峠まで雪のぬかるみを歩く。小峠の岐れで車を運転していただく方とは分れ、登山道を杉谷まで下る。車道に出たのは１５時３５分。ここから車で帰路につく。天候は雨となり、途中若草山の山焼きも不完全燃焼らしく見られず九条車庫まで直行。１９時３０分無事帰着した。

〔参加者〕　和田良一、木原　滋、上島和彦、上島Ｆ１、石田　弘、松井部雄、原田加津子

津田　実、立花雅彦、井戸澄夫、大木秀美、奥村弘信、中村維源、横井襲二、
吉田　武、沢井佳三、方山宗子、鷲見敏一、岡田茂久

〔コースタイム〕

九条車庫 7:05 ―大宇陀 9:40 ―木津峠 10:00 ―高見トンネル工事口 10:30…高見小峠 11:15～11:35…平野岐れ 11:55…稜線 12:15～12:20…高見山頂標高 1249 m 12:15～14:00…高見大峠 14:30～14:40…高見小峠 15:00～15:05…杉谷 15:35～16:00 ―八木 17:30 ―九条車庫 19:30

第１４６９回例会

比良冬山トレーニング報告

広　瀬　光太郎

1月２８日（土）　大槻、吉田両氏と川原氏と私とで、岳連の講習に参加し、冬山の基礎技術を学んだ。この過程において当初、見学か生徒で入るのかの決定があいまいで、多大なる迷惑をおかけしたことを祇面をかりておわびします。

やっさもっさしながら、土曜日の昼から壬生を出発し、夕刻比良山頂駅に到着した。川原氏が三橋氏からゆずり受けた山スキー板を持参していたので、山スキーの練習を少ししようとしたが、靴とバインディングが合ったのは私の方で、残念なことに持参した本人が合わず一くされ。

望武小屋付近でゴア６人用のテントで４人が入ることで中は快適で、わいわいがやがやと夕食の準備にとりかかっていると岳連関係の人が望武小屋に結集するので、そこらじゅうであいさつが交される。テント泊りは京交の他２パーティであとは望武小屋泊りである。夕食は京交名物のホルモンで、その臭いにうらやむ人ばかり。津田氏からさし入れられたウイスキーを空にし、そのあとはホルモンの肝でおじや、その格別なこと。

２９日（日）の打ち合わせのため望武小屋にいくと３０人ぐらいがびっしりと缶ずめ状態になっている。班編成、装備の点検が行われ、私は１班に入った。打合せ終了後、テントにもぐり、朝７時出発ということで深い眠りにつく。

翌朝６時すぎに目をさますと、テントが雪のためゆがんでいる。中からテントをたたいて雪をはらうがなかなか落ちず、吉田氏が外へ出る。新雪が６０～７０センチぐらい積っており、武奈ケ岳の道は完全に消えている。早々と朝食（ラーメン）をすませ、岳連の参加を待つがなかなかこず。しかたなく、途中まで京交がラッセルをし道をつけておく。しばらく待っていくとようやく岳連の参加者がくる。総勢４０人の大パーティでラッセルを行う。

私はワカンを持ってこなかったためワカンのあとをいくが、ボソボソとひざ上ぐらいまで雪が入る。ラッセル組が交替し、後につくため、最初１５番目ぐらいについていたが、武奈山頂付近では４番目になりそのしんどいこと。全員山頂につき、班を整え、練習に入るが吹雪と寒さで体が思う

ように動かない。アイゼンワーク、ピッケルストップ、滑落停止の練習を2時まで行う。私にとっては非常に勉強になった。全員2時で終了し、早々に望武へ引き上げる。小屋泊りは身じたくが早いがテント組は、なかなかだ。テントを撤収し、ロープウエイに行くと、大行列になっているので大山口ルートでおりる。しり制動でおりる時は横が雪の壁になっており、まるでボブスレーをしているみたいだ。

大山につくころになると日はとっぷりと暮れ、アイスバーンになっている。そこで川原氏、スキー板にすわりこみ早々とすっとんですべっていく。バス停につくと岳連の人々が、それぞれスキーですべっておりてくる。早速、吉田氏の車に乗り込み、壬生へつくと私の車も15センチぐらい雪がかぶっており、大雪であったことがわかった。

今回の山行きは、基礎技術を勉強する上で大変参考になり、私にとって、意欲をわかせるものであった。

〔参加者〕　大槻雅弘、吉田　武、川原博治、広瀬光太郎

山癖雑記　二二

伊　藤　潤　治

ことし（1983年）の、私が登頂した山を振返ってみた。使用図は、市野瀬、大河原、赤石岳、（甲府）。上松、（飯田）。白山、（金沢）。冠山、横山、竹生島、（岐阜）。桑名、御在所山、亀山、（名古屋）。長島、名張、（伊勢）。木本、（木本）。熊川、小浜、舞鶴、（宮津）。広根福知山、篠山、（京都及大阪）。津山東部、（姫路）。奥津、（高梁）。八重、大朝、（浜田）。以上の26面。

登頂数、45座。私にはこれ位いが少なくも多くもなく、分相応だろう。だが、この内19座の紀行文は、未記のまま。こんな怠慢は惜しみない登頂を許してくれた山に、失礼であると今頃になって心が痛みだした。山は、恩知らずとはいわないが「登らしてもらってきた」のである。世話になりっぱなしはようない。

たとえ寸記であっても、山々の語りかけてくれたもろもろ、や、うけた感激は後日のためにも心して記しておかねばなるまい。

一　姫越山　（長島）

登路は、新桑瀧と、錦とにあり。私たちは、1月14日、錦から登った。しかし、日の出を山頂で迎える計画には、新桑瀧がよかったようだ。錦峠から曲折の甚だしい路を錦に着いたが登路不明深夜ではどうすることもできず、朝まで車内。明るくなったので救えを乞うべく移動。最初に出会った人に、ここが登山口です、といわれ、何とうまく迷いついたものだ、その喜びで寝不足は吹っ

飛んだ。朝食は好展望地でとろうと、コースにのる。コースは破線どおりだが、昨夜地図読み君がしっかりしていたとしても、この道は登りづらかっただろう。福羅道の合う前峰的な440m峰で朝食、その辺りから道がよくなっていて、姫越山Ⅱ△503mは近かった。

まぶしい輝やきを浴び、御来迎でなくても幸せな山頂だった。眼下にあった芦浜池や蛇島の景がまだ目に残っている。下山は勿論往路だが、気がつくと往路になかった明るい谷間が、足下にひらけていた。このよい道は、中河内からのようである。登りなおせばいいのに、ごきげんにまかせてウラジロ群生の斜面を横断、往路に出て車にもどった。

なお、姫越山には次の伝説がある。紀勢町の東南、南島町との境界の姫越山に、姫塚および侍従塚と呼ばれる墳塚の跡がある。昔、木曽義仲の姫が、一人の老武者と共にこの地に落ちのび、山中道峻しく、疲れと渇きとで姫は倒れてしまった。老武者は急いで錦側の奥川に下り、着物の片袖をもぎ取ってこれに水を浸して引返してきた時には、すでに姫は死んでいた。そこで彼は姫の骨骸をその場に弔った後、自分も割腹して姫の後を追った。これを憐れんだ里人は、石を積み上げて姫塚をたて、水を供えて参詣した。また少し隔った所に老武者を葬りジジガ塚（侍従塚）と称した。その後、里人は病恢復を祈ってこの塚に詣でた。しかし現在は荒れ果ててそことも見定めがたい。姫が尾の姫塚訪ね参るなら、女の病、癒へさせ給う。（紀勢町誌による）。

二　亥ケ谷山　（木本）

これは、毎日新聞1983年1月10日（夕刊）に「24年前の正月から毎年、その年の干支（えと）と同じ動物のついた山に登り続けてきたベテランばかりの登山家グループ「十二支会（山口政一会長）」が、イノシシ年のこの新春、とうとう十二支の二回り目最後に達し、15日に三重県尾鷲市の亥（い）ケ谷山（標高688m）に登る」と報道している山行である。

山は高きを選ばず、低きを尊ぶ。会規の山のぼりも楽しいが、年に一度の行事だけに前夜祭は一期一会でもあって、熱い友情の「るつぼ」。十二支会ならではの喜ばしさがある。

山麓、賀田町に立ってあおぐ亥ケ谷山は、どう取付こうか戸惑うけんそな偉容を示していた。その頂上で十二支会の皆様から私は、過分に古稀のご祝福をうけ、感激と幸福で一パイになった。その節のご芳志は、有意義にさせていただく積りである。

三　大河内山　（長島）

四　カシタニ　（長島）

亥ケ谷山の帰路に紀伊長島駅北西約3Km半の有久寺（ありくじ）温泉を見つけて泊った。この温泉は、神経痛・胃腸病などの人で繁昌し泊れない時もあり、電話で確認してくれという、この土地のちょっとした名湯らしい。不動尊か何仏かを祀っており好みにもよるが、私は山旅にもよい湯宿であると思った。

大河内山は、翌朝9時頃国道42号に出て北行、紀勢町柏崎で右折、古和河内を経て古和峠に着く。予定では町界稜のピストンであったが、電電公社の車道が峠にあってこれが調子よく、ながめ

のよい廻転展望塔のように山を一巻半して頂上に上げてくれたのである。

爽快であったが電波塔だけで、標石が見当らない。岩屋山△727m（但馬竹田）のようだと思った。ところが標石はちゃんと在る所、西峰あった。西峰は南方に、松浦勇次さんの「三百山登頂」を祝った。有地山△557mが立派に見える静かないい山頂だった。

北方は、この大河内山と縁の糸を結んだような送電線でつながる△564mが向いにあった。この関係を重んじて登りたくなり、山麓、注連小路に入って山名をたづねると、△564mはその西辺の谷名、カシダニと同名だった。コースも谷を詰めるか、送電塔へ上るかだ、と教えていただき谷の出合につく。

右におこもり堂だろうか「遍上金剛」の額を掲げた黒い建物、谷には、なぜか鳥居である。谷奥には20mの不動滝があるそうだ。冬のせいか谷巾の割に水は貧弱、約300m入って会った人から別の道（巡視路）を勧められ、そちらに廻って登った。この山頂も展望がよろしく、浅間山△734mが大きく、はるかは局ケ岳△1029mものぞめた。

下山には、珍らしい萬年茸（さるのこしかけ科）、一名霊芝もみられた。

五　鎧　岳　（名張）

六　兜　岳　（名張）

曽爾村門根（かどね）から鎧岳の絶壁に息をのみ、昨年の10号台風による被害の修復ができたばかりの風呂谷林道を辿む。梯子の上で枝打ちをしている人から、鎧岳の道は一本松から右へとっていけ、と教えてもらう。550m地点で林道が終り、よく踏まれている落合への破線路がつづき峰坂という。右に草付きの岩塊、一本松にはとどいていないが、そこにそれらしき細道があり。

細道に入ると、まともに太陽を浴び、ぱっとすばらしい景観が開けた。そればかりか今までの日影では、霜柱や氷柱のある2月1日の寒さであったのに、陽ざしはどうしたことか汗が吹き出す真夏の暑さであった。

鎧岳西斜面の植林内を急登して、尾根に上ると、ハイキング標が立ち、すぐ△894mがあった。辺りは穏やかであの絶壁の山とは思えない平凡な頂き、危なげのないのがうれしかった。

いまから向かう兜岳は、鎧岳と谷間をへだてている巨峰だが、見た目には堂々とはしていても鎧岳ほどの威圧はない。兜岳をのぼるべく尾根をかえして峰坂の峠につき、登りになる。植林斜面の急峻峰、少し下って左に断崖がのぞく登り、足下が深く落ちこんだ冬道は緊張も大変。やれ登ったと思ったが小峰、頂上はまだなのかと妙にはかどらぬように思えていらだちそうになり、笹のトンネルを登りつめた。ようやくそこが兜岳920mであった。爽やかな木立に囲まれ展望のない山上だが、山肌の座り心地はよくて、のびやかに憩えた。鎧岳は姿ほどのこともなかったが、この兜岳にはお見それいたし、兜をぬがされた、と思った。

七　堂床山　（広根）

八　大峰山　（広根）

地形図は山名不載だが、なぜか堂床山は訪れる人も多く有名である。2月25日は、三草山と堂床山を。能勢町石堂西の府県界から槻並川上流へ出て、双方にアタックしようと出発。だが、その府県界の道は、入口に当る火薬工場が立入禁止をしていて予定を狂わした。槻並川へは峠を猪名川町へ下れば、地形図に実線（記号道路）がみえ、これに乗り換えるしか手はなく、猪名川町へ下った。

ところが今度はこの道が不明。あきれて仁頂寺にころがり着くと、堂床登山のちゃんとした道があり、あほらしかった。右岸にある林道を約10分、左にたたずまいの佳い山道。この道をみて急に林道が嫌になる。お気に召した山道で尾根に上り縦走。大した藪はなく、木間越しの展望が諸所にあって気ままな一人旅を退屈させなかった。△584mには、仁頂寺二等三角点一次基準点測量昭和52年8月・日の禮と先登していた若いママさんパーティ（日生・大和田地）でにぎやかであった。ママさんパーティが槻並川に下ってしまい静かになると、小雪が私の午餐会に舞いはじめ、落葉焚きの火とともに風情をそえ、たったこれだけの事だが私を浮き浮きさせた。ママさんパーティが「物凄いです」とおっしゃった急坂を、ヨボシ（コンター 560m）との破部に下り、そこで東南の・570m峰に、あれはっと見とれ渓流ぞい道を林道に出て、仁頂寺にもどった。そしてこの日見初めた愛宕山・514mの登拝にうつる。アンテナケーブルの埋設や露岩のある急坂をよじ一の丸、二の丸を経て、頂上三の丸、小祠が老稽に囲まれる愛宕神の聖域に上った。神前に御酒を供え、拍手、三礼、拍手。お供えはただちにその場でいただく、すがすがしさに包まれ自然にも酔う。こんな幸福感は標石をもつ山頂でも、そうはなかった。帰りは南峰から枝尾根を東にたどり造成地、その造成地内を車まで5分ほどの距離に戻った時、北方を見て、おやっと思う間もなく猛吹雪がやってきて、私を雪ダルマのようにして顔の汗を洗い、熱していた体を冷やし気持よくしてくれた。

大峰山は「広根図葉」に住む孫11歳の誕生記念で、「こどもの日」に登った。川西市城山から多田神社、寺生、鳥脇を経て十万辻につき、ある案内書の「上り40分」と記す尾根の小道に入った。藪でもあったが、しばらくで左の林道が気になって振り出しにもどる。

折りよく来合せた人から林道をたづねると右手によい登山道があるように教わった。林道に入って人に会い、念のためたづねるとご存知ない。その登山道がどの辺りか未確認であったから怠りなく右を見て行く内に焦れてきて、これはと思う踏跡の藪を詰め尾根道に出合い、△552mに登達。木立があり展望のないのは我慢できたが、払ってもまといついて離れぬ、めまとい（慊蚊）のため残念ながら瞬時の渋滞で退却。上り40分の予定に三倍もの時間を費し、あわてたのだろうか、気がつくと渋谷近くまで下山していた。間違えたこの道は「来合せた人」からきいた道かも知れない、と思ったが登りなおして往路を駐車地点に帰った。かえりみると粗雑な面が多く、大峰山から「なめんな」とお叱りをいただいたような気がしている。

九　後日照岳　（白山）

十　丸　山　（白山）

私もどなたかの登頂ばなしを聞かされたり、どなたかの紀行文やどなたかの記録にお目にかかった等で、胸をときめかし山のぼりに燃えていられるのだが、また別に情報皆無の山にも興味と情熱

をかきたてられている。白山五万図葉で、日照岳△1751mの西北にある△1869.5mは点名が日照岳である。登頂記録に山名が必要になってご教示を乞うてあった白川村から折角ながら調べる資料も、たづねる古老もなく、あしからず。と「にべ」もなき返信。

その後、荘川村、吉田輝穂氏に積極的なご尽力をいただき、字地名で北俣岳か、三角点名を生かし位置方向により北日照岳か、奥日照岳か、あるいは本日照岳か、と出たが、たまわったお墨付は後日照岳。「後」には、この山の測量、位置の理由を含み大体それだけで納得いただけると思うが甚だ私事で恐縮だが「後」は私の忘れ得ぬ岳友の字である。

今年は日照岳と後日照岳と、白山図葉の二山を登りながら、美しい笈の御前峰のお姿にはお目にかかれずである。それと大峠△2,168.7m・焼ゾリ△2,082.7mの登路や、アワラ林道がどこまで延長しているか気になりだし、昼夜取りつかれたように地形図をみる目がつづいた。

図上思索を煮詰めた頃、営林署からアワラ谷林道情報と通行許可をもらい、すべてはアワラ谷林道を詰め手近かな丸山（点名△1,900.6m）の登頂をこころみることで、明白になると思った。9月18日、その日は三度の正直とは正直な諺である。御前峰が私の熱い視線を浴びすぎて、はづかしがるほどの快晴だった。

林道は小豆谷までつづいていたが、タキ谷以奥は営林署が伐採作業中で車行不能のため、タキ谷手前に駐車して歩く。林道はやはり小豆谷までで、それからは前進を断念すべき物騒な地形である。ここで前進を打切られては大峠・焼ゾリは、アワラ谷溯行だろうか、それとも尾上郷川からが賢明か、後日の宿題である。

小豆谷はあらかじめ入れてきた予定線を踏もうと思い、小豆谷に入る。ゆるやかで豊かなふところの美しい渓流である。しかしあまり穏やかでやさしいこの渓相は、前途に越え難い壁。そんな不安を抱かせる妖やしさを感じさせた。右岸から左岸へわたり右寄りにたどって・1,379m南裾で尾根にとりつく。尾根は自然にまかせた木々ののさばりや、茂ってもつれ合った枝垣の世界。その一つ一つをていねいにほぐしていく。案じた壁はなかった。村界稜へ登りつくと、にわかに木立・笹が疎少になり、明るい南望もそえられ別天地に一変して感動的風景になる。

笹の緑がふくよかな山頂をビロードのような艶やかさで美しく彩っていた。鮮やかなこの緑は、林道でゴルフ場のようなきれいさだ、とあおいだものだった。緑の園の愛称をおくりたいこの山頂のながめは、白山諸峰、勿論日照岳、後日照岳も気象条件に恵まれれば御岳や北アルプスも可能であろう。丸山の頂きは無上の楽園であると思う。ルートは時間を惜しまずつけてきた。同好の士に推奨しておきたい。

十一　甲斐駒ケ岳　（市野瀬）

十二　仙丈ケ岳　（市野瀬）

どえらい山縁がめぐりきて、8月27日は甲斐駒ケ岳。翌28日は仙丈ケ岳を登らしてもらった。これはまったく思いがけない山を登った。と実はまだあきれている。甲斐駒・仙丈といえばかくれない名山であって、絵はがき、写真、展望等で啟発されていてまんざら知らぬ山ではないのだが、

この両山には胸がときめかず、ほとんど無関心で登欲はなかった。無関心について考えると、私には名山の経験が少なく名山慣れがない。これは名山は、すばらしさより遥に「心くばりなき混雑」が大なるためである。

しかし詰まるところは私と甲斐駒・仙丈とは、縁遠くて機会の訪れがおそかったという事かも知れない。とはいってもこんな私を登る気にしてくれた縁結びの神。つまりすばらしい岳友のあったことを明記しておかねばならない。この岳友と同行であったからこそ、私の胸がときめいたのである。これで私は、向後、名山づくかも知れない。

末稿ながら、ここにあらためて〝ようこそ〟と藤井茂雄・石原順次両氏のご友情に感謝申し上げる。

十三　ハッチョノミネ　（舞鶴）
十四　君尾山　（舞鶴）

１０月３１日　蓮ケ峰が登りたくてこの峰の南麓の小集落を訪れた。そこは「てらのだん」といい、「ありがたや山のめぐみの日れん寺」を掲げたささやかな日照寺（無住）をもっていた。かってはここが君尾山光明寺とならぶ名刹の地であったそうだが、今はわずかに往時の学問所や僧房所在跡だけの名、アンジョナル・ラクボンボをとどめているのみ。しかし現存するものとして、日照寺から奥の坊へ至る間に八十八ケ所といわれている石仏群の点在がある。

なおこの地の茶は、弘法大師の植樹といわれ、加えて水質が良いため風味のすぐれた銘茶だときかされた。△５９６ｍへは、日照寺から石仏がならぶ樹下の道をのぼって、文化６年己６月吉日を刻んだ「つくぼい」のある奥の院に至り、このあと伐採地が少しあって、道は雑木林でなくなる。

それからは「道がなくても這っていけば登れる」と「テラノダン」の人がいっていた言葉のように木立のまばらを縫っていく。右方が植林。私は左寄りをたどって主稜へ上り右折して日照寺から１００分で「東八田村二等三角点一次基準点測量、昭和５２年」とわれかけた檜のたつ山頂についた。植樹の成長が展望をとざす杉・檜の枝下での昼食であったが、頭上には梢がちぎれそうにゆれ、白雲の流れる青空があり、いい気分だった。往路を下山、シブタニハルノさんにお礼をいって帰ろうとすると、ハルノさんは、君尾山も登っていくようにすすめてくれた。

時間を気にすると、車だから心配無用といわれた。井根口に出て東北に約１０分で「君尾山登山口」の標をみて左折してまた約１０分で光明寺に着き、お詣りをしただけで国宝仁王門にかまわず辞去。すぐ△５８２ｍに向う。林道の延長と尾根の皆伐ぶりには驚いた。林道は尾根を縦貫しているのではないか。約５分、彼地が標石地点であると断定、至近位置へ駐車。あっ気なく君尾山（睦寄二等三角点）△５８２ｍに至る。

海のみえる山、３６０度の明るい展望は晴れがましいほどだった。しかしどうした事だろう、私の心は落つかず約１０分滞頂で帰路についてしまった。惜しいようだが後悔はない。

十五　二児山　（大河原）

十六　尾高山　（赤石岳）

また藤井さんのお世話になって大河原図葉最初の山、二児山の登頂が記録できた。その１１月１２日朝、鹿塩川左岸道は激しい落葉しぐれの荒涼たる風景の輝やきの中にあった。嶺内路から中峰黒川林道をのぼる。部界稜は鮮明だったが目ざす二児山は、山霧に深く蔽まわれ姿をみせない。約７キロ地点で中峰黒川林道と別れて北川牧場道に入り、約１キロで牧場管理小屋に着く。

車外に出た私は、意外な寒気と不穏な空模様に、これはまずかったと思った。登る山の標高が、２，０００ｍを越えているのにこのところの暖気と晴天つづきのため、防寒衣や雨衣は旅館に残してきたのである。積着なのか、呑気なのか、へまをすれば生命に関わる程の装備を軽視している自分にあきれた。この分では、寒気や悪天の苦労は明白だが、その時はその時の対処があると私は高をくくった。小屋から放牧斜面を尾根に上ると仕切りの牧柵がもうけてある。牧柵ぞいの道はすぐ深い笹にかくれ、間もなく雪が降りだし笹葉は雪をのせ厄介なことになった。

笹地がシラビソ帯にかわってから濃霧と風雪のため、珍らしくルートに不安を感じた。急峻な斜面にかかって自信はついたが、登り詰める寸前で激しい風雪の中に立つ露岩の冷凍体には、ゾーとして息をのんだ。東峰は無風で森閑としているだけで、標石のある西峰への道も、西峰の展望も備えていなかった。コンパスに導びかれていく実生密生林になやまされたが、めでたく二児山Ⅱ2,242.7ｍへ登頂。

ぬれた衣服のままの祝盃は、あん入り生八ツ橋をほおばり、冷やどぶろくをいただき美味だったが、急には温ってこず胴ぶるいがとまらず困った。東峰に戻り焚火と昼食をたのしむ。カラマツの枯枝が小気味よく燃え、冷えた衣服、軍手の解凍でくつろいだ。初地図、初雪と記念すべきもののあった二児山は、私には不用意が身にしみ痛快な後味の残る山でもある。

旅館は単純流化水素泉で古来から皮膚病、胃腸病、外傷等に特効があり、不老長寿の温泉として親まれているという赤石荘。室名の「とびがす」を珍らしがって聞くと「お昼やま」とも呼ばれている青田山△１，７０７ｍの別称であった。地形図では北東麓に「高ケ巣」を注記している。

赤石荘でうれしかった三点は、1. 財布が戻った（詳細を略す）。　2. 弁当が良い。　3. お湯がすばらしい。二児山下山の夜は食前食後、尾高山の翌朝もひたってきた。１３日、８時から朝食をとり、弁当をもらって外に出ると、昨朝は艶やかだった秋の景が凛然たる冬に一変していた。その積雪は一瞬、尾高山の登頂を不安に思わせた。青木川を安康までさかのぼると、不意に、真白き秀峰奥茶臼岳△２，４７３．９ｍが現れ、その絶景に肝をつぶし、ぱっと私の登高心に火がついた。

地蔵峠の道は地盤軟弱で補強工事中だが、積雪も加わって嫌な路面であった。地蔵峠の向うは未補装で地形図にまだ無い。ここも道路補強をやっていて、作業の人から、しらびそ峠までは大丈夫だと保証されて進み、しらびそ道に入ると先行車のわだちはあったが、伐採後で裸の山ヒダの雪道を縫うていくのだから、ただ乗せてもらっていても神経がとがった。復路は足元の明るくて暖かい間に通りたいとしきりにねがった。

西空を南北一線に引いてたれこめたカーテンのようであった白雲は、雲海の底部だろうか、帰りには消えていたがこれは何という現象だろう。

しらびそ峠につくと、先行車（浜松ナンバー）から若者二人が尾高山をめざして行くところであった。しらびそ峠の標高表示は1，833m、赤石岳を展望できるとあったが、この日はガスがどっかと居座っていた。10分ばかりおくれて若者の踏跡をたどる。笹や灌木の着雪が払われていて、ありがたかった。この登りだしで藤井さんにいい枝を探していただく。不覚にも昨日、和崎教授鹿倉山作を紛失したためである。

暫らく登るとしらびそ林になる。「前尾高（2089m）」辺りで雪が降りだした。しかし今日は充分な装備でラッセル済みコースを歩かしてもらえたのだから幸せである。若者二人の下山と出合って約5分登るとしらびその若木群のそばに雪をかぶった岩と小祠があって、こんな所にと思うそこに尾高山△2，212mの標石は垂っていた。上空では風の神が何やらやかましく騒ぎたてていたが、標石地点は無風の別天地で雪はやんでいた。

十七　水晶岳　（御在所山）

水晶岳は折角鈴鹿山地中心部の主稜にあるのだが、惜しいことにこの位置ではちょっと標高不足のため、ほとんど注目されぬ岳のようである。実は、水晶岳があまりにも慎ましやかなので、最近まで私も見落していた。11月23日、奥村さんと三橋君と私とは京都を早発、朝明峡谷奥の伊勢谷に至り、根平峠を経て水晶岳に登った。やはり、高くさわやかな空の下、御在所山、雨乞岳、イブネ、銚子ケ口、釈迦岳の心にくいゆとりのわがもの顔が周囲にあり、水晶岳は何ともつつましくてひそやかなる存在であった。

このあと、雲母峰△888mを登り湯の山温泉で汗を流して帰る予定であったが、この水晶岳の身上と心根がいたく気に入り、雲母峰を割愛してめるゆる滞頂することにした。好天が山々を眺めさせて私たちをこころよく酔わしたのである。

中峠から下って湯の山温泉にいく。しかしかって私がなじんだ湯場はなく、現在入湯のみOKは国民宿舎だけのよう。だが入湯は16時からという。この待時間で名物をと、私の故郷桑名へ飛び串団子、冷、あさり貝のお土産がととのい時間も頃合いになった。けれど、もう湯の山に戻るよりここでの風呂がほしくなって、思いがけない桑名温泉を教えてもらった。

桑名温泉は長島温泉と揖斐川をへだてた地にあって、入湯料金200円、湯は透明麦茶色、湯温は日によって上下差のある天然泉。階上は自動販売機、あんま機を備えた無料休憩所に開放してあり、家族づれの利用者でにぎわっていた。いい湯にひたれた私たちは、〝きいてみるもんやなー〟を何回口にして帰っただろう。

この山行で朝明峡谷の変容ぶりに驚いた。私の記憶には、ちょん番親爺の小屋だけしかない。あれは釈迦岳登山の前夜だから1966年3月13日、既に17年の歳月が流れ名勝地だから、こんなものかも知れない。その折、釈迦岳を案内してくれた松浦邦雄、福田和正両君も思い出した。イブネを知ったのもこの人たちの「鈴鹿源流会」である。イブネも登りたい山になった。

十八　鳥倉山　（大河原）

はじめ11月27日は、飛騨の焼田和△1,526mの登頂を計画したが、11月20日、吉田輝穂さん（荘川村）から「寒波襲来し里雪30センチあり、残念ながら山行を断念しましょう」とストップがかかってきた。私は飛騨が駄目なら美濃か奥三河を登ろうと思ったが、この計画には足跡あまねし登山家、橋本峯雄さん（近畿山行会長）と宮崎日出一さん（山岳巡礼版元）にお付合いをねがっていたので、俄かに焼田和におとらぬ山、ともに満足できる山が必要になり、考えたのが前夜赤石荘利用で、大西山△1,741m、或は鳥倉山△2,023mの登頂であった。ご両所の快諾を得て赤石荘に宿泊を申込んだが予約満員。つづいて山塩館も断わったが、山景館はOKをしてくれた。11月26日、15時30分、三橋勉君の愛車運転で、橋本さんと宮崎さんと私とは、北山しぐれの国鉄山科駅広場をあとに名神高速を走る。

八日市付近から大垣辺りまで小雪や小雨。中央高速は晴れで入線したが、恵那山トンネルを出ると小雪、県道59号も風花程度が舞っていた。山景館着は19時15分、あふれる湯に浸りすがすがしくなってにこやかに前祝の宴をはじめた。

橋本さんも宮崎さんも明朗きわまりなき酒豪、おかげで〝くめどもつきず、飲めどもかわらぬ〟豪快な大酒盛りになった。たしかにうまい酒で、やがて花人や天平美人、その他佳人たちの賛美など、宴は明日の山を忘れたような盛況。おひらきは24時であった。

山景館へ泊る破目になったが、この方が幸せであった。先づ部屋で制限なく飲食ができ、次に朝食を7時に出してくれ、おまけに登山案内。鳥倉山は大西山より車行ができると推奨、あちこちへ林道状況を問合し送りだしてくれた。

11月27日、表にでると空地や伐採あとは白かったが、道にはほとんど積雪がなくほっとした。林道には向山牧場の他に、鳥倉山を巡る新設林道があった。私たちはその新設林道をいった。はじめ路側だけであった積雪が、上るに従ってだんだん増量、路面を包んでしまった。けれど前輪駆動車は健気であった。こころよく前進をつづけ感動させられた。

林道は山ヒダを縫い続いていくが、そろそろ登山にかかるべき正念場にかかっていた。なお車依存をつづけようと所沢左岸林道にチエーン装着で駆けこんだ。折角チエーンをつけたのにフォークリフトの駐留が進入を阻んでしまった。これで良かったのである、ルートはきまった。所沢の右岸に戻り、ふくらんだ林道隅に駐車。そこに面している小規模の伐採斜面から作業路を拾い登る事にした。取付こうとすると下方に声がしたので〝鳥倉山に登るのだが〟と念のため尋ねてみた。もらった返事は「鳥倉山なら向山牧場からだ、ここからは登れない。」だった。

宮崎さんの軽やかで驀けるような速さに、三橋君もつづき橋本さんと私をはなしていく。橋本さんと私は1913年の癸丑年生れで、山好き酒好きまで一緒。これだけでも珍らしいのに、今日は手をとり合って一つの山を登っている。こういう同年は稀だろう。ある程度の困難、苦痛をともなってこそ〝ええ山やった〟としっかり思い出に残るのだが、近頃腹部の突出が原因なのか登りの息切れがひどい。しかし単独行ではあまりしんどい思いをしていない、なぜだろう。

元気で速い二人の後を追って尾根に上ると、雪をつけた間伐倒木や下枝の突張った落葉松林が待っていた。そんな落葉松林の灌木や下生えをうまくかわして進む踏跡に従っていると、植生がシラ

ビソに変り積雪も深まって私は遅着したが、右振りにたどれば鳥倉山Ⅱ△2,023mであった。ところがこの山の標石は不思議な状態になっていた珍らしい標石なのである。発掘者宮崎さんによると、倒木（シラビソ）の根下に埋れていたのである。すっぽり根が抱きかかえていたであろうものを、よく発見されたものである。

これは、シラビソの実が標石をおおう成育をとげ、成長のあまり根付きが及ばなくなっての転倒と考えられないだろうか。とにかく深山ならではの光景であると思う。つづいてこれも例のない事だが、東隣に方形の切石が埋めてあった。後日、盤石であったかも知れないと思い、国土地理院に問うと「盤石であれば中央に十字が刻んである。」というが、だが私はその辺を何も調べていない。この詳細は国土地理も知らせてくれといってきた。この確認、ご面倒でも藤井さんにお引受けいただきたいと思っている。

祝盃と昼食は標石の東辺にあった陽光を浴び無雪で好展望の空地を利用した。そこで私はあまりの大観にすっかり幻惑されてしまい、宮崎さんの指さす悪沢岳、魚無河内岳、前岳（荒川三山）を見えないと信じ頑固に否定しつづけたのであった。後日、用あって赤石岳図葉を取り出したついでに大河原も出して眺めてようやく誤認であったことを知って参った。

あれは宮崎さんの説明どおり荒川三山に間違いなかったのである。宮崎さんには思わぬ失礼になって恐縮であったが、この件は私に勉励につとめる必要を痛感させてもらっている。鳥倉山の頂きで登りたいと思ったのは、塩見岳、奥茶臼岳の二山だけであったが、こうした経緯があって荒川三山も登りたくなってしまった。

十九　品又峠北　（横山）

第1449回例会、出発、坂内の山をいく　第一回ケツネボラノウエ報告で「坂内村内に新設されたⅣ△10座の資料をたまわった」と述べておいた。そのⅣ△10座は昭和57年度に設置されたが、2万5千分一図は早ければ、59年度製図、60年度刊行のようだ。5万分一図の刊行は、さらに1～2年後になるそうである。

こういうまだ当分は、地形図未載のままである標石群だから、あまりいじましく登ってしまいたくないのだが、坂内の山に未踏の山が残りすくなった私の食指は、自制を失って12月21日その未載の標石つまみをやってしまったのである。

11月20日午后、奥村さんと（渋滞のため10分遅着し）にわか雪の熊野神社東で、河村君宅で彼と合流、名神関ヶ原、梅谷越えで藤橋村の横山商店に寄り、松竹梅、竹輪、田舎饅頭、甘納豆（¥1,560）を購入し、横山ダム畔からの雪道を諸家山荘に入った。

入浴、つづいての夕膳は熊肉と大根、鯉の煮付、鯉のつくりその他で銚子6本。つもる話に花は咲いた制に酒はいらなかった。食後、河村君のスクリーンに雪の花弓、小金ヶ岳、サザエ西方などのスライド映写、若かりし頃をなつかしみ、就床23時30分すぎ。

山が登りとうて矢もたてもたまらず燃えてとんできた筈だが、朝食を7時とたのんだのを忘れて寝こみ、女将に7時半の声をきかされ驚き我にかえるという不様を演じた。

昨夜は本日の山を「品又峠北」か「県民の森」か何れを登るべきか思案のままだったが、この朝寝坊が「品又峠北」に向うことをきめてくれた。諸家山荘（一泊二食弁当　¥14,580）からチェーン装着で、裡斐高原スキー場（駐車料　¥600）につき、登山活動にかかる。

打合せの折、輪かん必携を話していながら私は輪かんを忘れてきた。若い頃から輪かん歩行の快味に惹かれ忘れられない筈なのに、不携行は恥辱のきわみであった。1Km余という品又林道をお二人のラッセルに従う。40～50cmにはじまり60～70cmに及ぶ新雪は、にくらしいほどのきれいさだが、踏みこんでいくと美しさに不似合な白魔のおそろしさを秘めていた。

無雪期に車を使えば10分ばかりの林道の往に4時間、復に3時間を費やさねばならなかった。藪のような抵抗は皆無だが、柔軟で軽い乾燥粉雪は甚だ不安定であって藪よりもうるさく骨が折れる。品又峠に近づくと奥伊吹スキー場のスピーカーが聞こえ、リフトが見え、峠北に登りついて雪中のⅣ△1045.5mを汗みどろの顔を寄せ合って確認、よろこびあった。

そこには奥伊吹スキー場展望台があり、食事は展望を利用。歩行中から御岳は白く抜んで見えたが、展望台では更に輝やく乗鞍、北アの諸峰、白山が加わった。また南と東南方を除く美濃の山々も…　まるで私たちを祝福しいる注目振りのようだった。「品又峠北」は、登り甲斐のあった1983年度のすばらしい納め山であったと感激している。　たかがⅣ△と申すまじ。

個人山行

初詣　愛宕山

萌　郷　子

昭和59年1月5日

昨年の春頃より少しずつしか買わないのに、山道具を安く購入させていただいてる山用品店の御主人より台川さんの山岳部報の記事、オモシロイですよ？　やめずに続けなさいよ!!　と言われて不安な気持で投稿をしていた私には大変有難かったのです。「それでは」とすぐに調子にのる私は部報への投稿を続けようと（困る人もおられるかも…？）今年の初登山の事を書きます。（休みの都合で残念ながら例会へ出席して皆さんと共に登れませんので一人で行きました。）

昨年12月部報の1462回例会自己体力を知る愛宕山測定登山を見て、私も体調を整えるのに毎度愛宕山を利用させていただいてますので自分の体力測定を合せて報告します。

今年も例にならって毎度ながら勤務終了後の5日、小雪もチラつき正月気分も抜けぬ街中を清滝へと急ぎナガーイ信号待ちのトンネルを抜け坂を降りた所の駐車場へ、そこの御主人と今年もよろしくと挨拶をかわしポリタンク（水20ℓ入）をザックに詰め込んで出発、鳥居をくぐった茶店の前で下山してこられた西賀茂山楽会の赤崎さんのお二人に出合う。お二人共背負子の上にポリタンクをのせて初詣登山を済ましてこられたそうで、途中より積雪があり滑べるのでアイゼンを持ってますか？　なかったら…と、いや有難う－　四つめを持参してます。　では気をつけて…の言葉をかわして登り出しました。

この事も昨年の１２月２４日の話ですが、私個人の納山の意味で愛宕山へ行き、丁度清滝でこれから登るところの愛宕山岳会の中村さんと一緒になり、早いスピードで引きずられて苦しみましたが、歩きながらいろいろと話を伺いました。これからの時期の冬山入りには３０㎏の荷で愛宕山を1時間３０分以内のスピードで登らねば無理じゃないですか、とか、他の山岳会では男子４０㎏、女子３０㎏の実働8時間のボッカをやってるとか聞いてましたのを、今日はマイペースで登ると出発してからすぐに思い出しまして、己れの非力もうっかり忘れすれ違う人達や景色（あまり表参道は見るところがないです）を一切無視しまして早足で急ぎながら登ってました。最近、特に時間を気にしないでと考えてますが、いつも山行では後塵を拝してますので「何畜！」との煩悩が捨てきれず悔んでおります。

中間点の小屋より雪があり水尾別れよりは完全に道を白くしてましたが、靴の裏にイボの付いているジョギング・シューズは案外と滑らずに頂上迄アイゼンなしで行きました。何かの参考に（あまり当てはまりませんが）なればと所要タイムを恥かしながら発表しますと、1時間３０分かかりました。（少し寒かったのですが、ジョギング・スタイルで行きました。重い登山靴に冬の衣服で登れば2時間近くかかるでしょう。）チャンスが出来れば３０㎏と４０㎏ぐらいまで挑戦してみたいのですが、気持の方が尻込みをしておりますので…。

以上のような有様で私には冬山への望みが持てないと悲観してます。しかし春のスキーツアーがあるぞ!!と雪山への少しの可能性を思い巡らし、そのトレーニングとして足腰のバネを作る為に愛宕山の下山方法を出来得る限り小走りにしてますが、積雪のある間はだめです。

しかしながらマイペースで昨年はボリタンク登山１７回のトレーニングができました。今年は月２回のペースが出来ればと考えてます。（考えてるだけです。）　あまり規則正しく回数を増すと疲れが残ります。何よりも健康が第一でカゼ気味や寝不足、又気分ののらぬ時はすぐに中止します。私事ながら今年の２月で満４６才になりますが、まだまだ現役でガンバリたいと思ってます。皆さんよろしく。

追記

愛宕神社社務所では皆さん御承知の事ながら水不足で悩んでおられます。一昨年頃、京都新聞に水運びの記事が掲載されて一時期、運んで頂く人々が増えたと喜こんでられましたが、長い年月となりますとなかなかです。

これは自分のトレーニングの為に負荷する品物として水を入れ頂上でただ捨てるは、もったいないと社務所に寄進している無償の行為ですが、私の場合は一石二鳥です。このおかげで冬山を除く他の山行には何んとか若い人達について行ってます。

我が山岳部の若い人達にもこの行為をトレーニングの一部として頂くと有難いのですが、いかがなものでしょうか？　人の笑顔は心の肥しになると誰かがいってましたが、無償の代りに笑顔が頂けると思います。　諸行無常、是諸滅法、生滅滅己、寂滅為楽。

例会報告

例会No.	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記事
1468	高見山	1月15日	晴後雨	岡田 茂久	奥村、津田、中村、松井、石田、方山、沢井鷲見、大木、和田、立花、井上、吉田、横井上島F1、原田、木原、以上19名が車5台に分乘して早朝、京都を出発した。	別稿報告
1469	武奈ケ岳周辺	1月28日～29日	雪	広瀬光太郎	吉田、川原大槻雅	岳連主催の指導員研修会が行なわれ、京交からも4名が参加した。積雪3mぐらいあり、冬山訓練をした。 別稿報告
1470	霧杖岳	2月 4日	雪	田中 忠久		国鉄草津線まわりで関西線の加太駅まで行ったが、積雪のため引返した。 京都発 7:11－ 7:40 草津－8:30－8:43
1471	（変更）武奈ケ岳スキー登山	2月 5日～6日	晴時々曇	大槻 貞従	古市 昌造 三橋 勉 三橋 功 武田喜久郎 大槻 雅弘	予定を変更して比良の八雲ケ原から武奈へ登った。昨年より積雪が多かったため、ブッシュもなく、頂上に11時ごろに到着した。下山は金糞峠から正面谷へとロングコースを滑り降りた。 次号報告

雑報

2月集会報告

8日　下鴨寮

出席者　OB　近藤　　梅津　吉田　　九条　田中　　高速　岡田

本局　方山、広瀬光、大槻、鷲見、和田、三橋、上田　　以上　11名

近藤親分より貴重な山の本を見せていただくと共に、昔日の山の本の話をしていただきました。近藤親分が持参していただいた山の本は下記の通りです。

「雪・岩・アルプス」「屋上登攀者」「山」「岩登り術」「山と渓谷　2号」「山岳」

他に大槻君「ぎふ百山」　吉田君「近畿の」等の紹介をしていただきました。　（田中担当）

帆布・濾布
テント・シート
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801-5331(代)

名古屋営業所
名古屋市西区児玉町7－30
TEL 521-7541代～4

テニス用品
スキー用品
山用品

交通局の皆さん
とりあえず　京菱へ
満足のいくようにします

京菱運動具店

下・大宮松原上ル
TEL 801-1331

一年中、山用品だけの
プロショップ

おかげさまで創業5周年を迎え、
店も大きく、商品も充実させて
頂きました。もちろん開店以来の
全品徹底バーゲン価格も続行中！

LOG CABIN

ログ ケビン

京都市中京区寺町通御池東北南入
☎(075)221－7569　〒604
(地下鉄二条駅の西の通りの御池上ル東側)
(JR京都駅烏丸口から徒歩約30分)

真の専門店として
好日山荘は前進しております
山とスキー用具の
ことなら御まかせ下さい

確信ある用具を
確信ある価格で・・・・

好日山荘

河原町六角下ル東入
TEL 241－1731

山の本

山岳書 電話ノ本にて
無料配送

ゆかり書房
075(801)8333

昭和59年3月1日

京都市中京区壬生坊城町48

京都市交通局内
京交山岳部

お知らせ
今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。
改築期間中（約1年間）は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。

チロル

移転先　本店2階
京都市中京区西ノ京円町24
ダイヤ運動用品株式会社

HORIUCHI KYOTO
まかせて下さい…ネ
山と乃キー
のことなら…

☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は ゼヒ 御相談下さい
山とスキー専門店
ビッグ ホリイケ
河原町店　上・河原町通丸太町東入
TEL 222－0363

御婚礼
御引越
ぎおん菊水
専門
ぎおん菊水運送株式会社
山科配車センター
京都市山科区西野山階町12－12
TEL (075)581－3101
本　社
東山区大和大路通四条下ル　541－2345
鴨川営業所
中京区室町二条上ル　256－3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・組品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品
贈答品総合センター
厚生会指定
サンコークラフト
西島輝雄
左・川端通丸太町下る下堤町88
TEL (075)771－3442

山とスキーの店
京都 あるむ
京都市中京区新町三条上ル
075－255－0288

HIKE & CAMP
この用具の事ならコニシが一番です！
御来店ありがとうございます
山とスキー レジャー スポーツ ショップ
そして
海の
コニシ
中・二条通河原町西　TEL 231－1202